

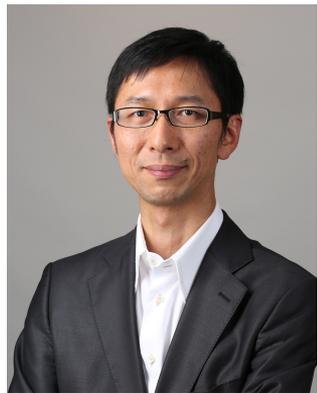
「今すぐ役立つクラウド活用術」
トピック別オンデマンド・シリーズ

お客様の取り組み

Make your deploy-anywhere future possible



講演者紹介



日本アイ・ビー・エム株式会社
技術理事(IBM Distinguished Engineer)
Complex System Integration CTO
久波 健二

大規模で複雑な開発プロジェクトにて、IT アーキテクチャー策定から本番稼働までを幅広く参画、お客様の成功を支援
最近ではマルチクラウド環境でのアーキテクチャー策定活動に従事
アーキテクト CoC リーダーとしてアーキテクト人材育成を推進

「今すぐ役立つクラウド活用術」トピック別オンデマンド・シリーズ

	タイトル	ご担当領域	スピーカー
#1	クラウドアドバイザリーで始める デジタル変革第二章	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 アソシエイトパートナー／エグゼクティブアーキ テクト 八木沼剛
#2	レガシー・マイグレーション	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 マイグレーション・エキスパート 北沢強
#3	コンテナ化アセスメント	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 IBM Open Cloud Center 吉田ひろみ
#4	クラウドネイティブ時代の新しいシステム開発	アプリ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 シニア・アーキテクト 石井真一
#5	DevSecOpsと次世代超高速開発ソリューションを活用した クラウドアプリケーション開発・運用のご紹介	アプリ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 アソシエイト・パートナー 谷松清孝
#6	お客様の取り組み	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 技術理事 Complex System Integration CTO 久波健二

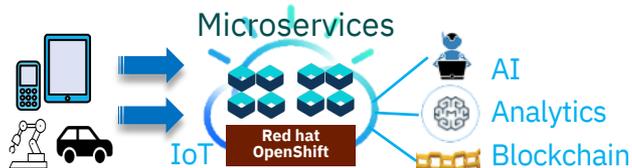


これまでのお客様の Journey to Cloud の 取り組みを分析しました

Journey to Cloud の取り組みパターン

A). 新規デジタル・アプリ開発

- ✓ デジタル系マイクロサービスアプリを Agile 開発
- ✓ クラウドで Mobile, AI, Blockchain, IoT 等活用



B). DevSecOps 開発環境

- ✓ DevOps をオープンソースやコンテナで実現
- ✓ DevSecOps を IBM Cloud Pak for Multicloud Management 等で実現



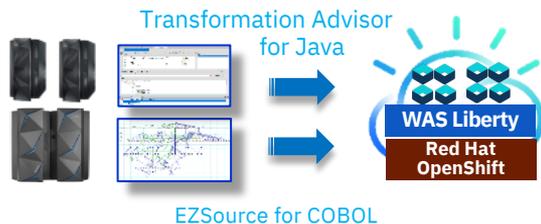
E). マルチクラウド管理

- ✓ IBM Multicloud Management Platform でマルチクラウド管理一元化



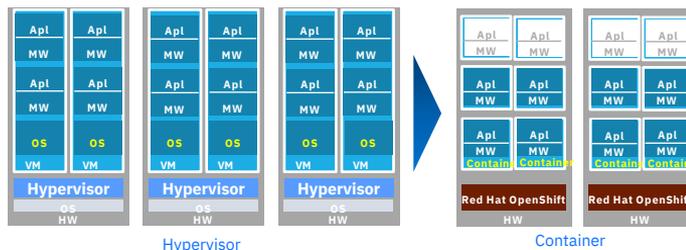
C). 既存システム・モダナイゼーション

- ✓ ツールで既存 Java や COBOL をツールで分析
- ✓ クラウド環境の新 MW や新言語にモダナイズ

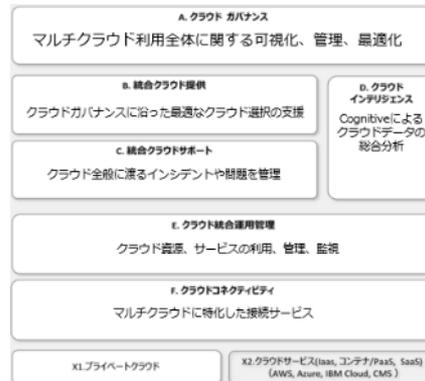


D). コンテナへのマイグレーション(LIFT)

- ✓ OpenShift で標準化しハイブリッドの可搬性向上
- ✓ サーバー集約や運用自動化し基盤コスト削減



- ✓ マルチクラウド時代の IT ガバナンス確立



Journey to Cloud の取り組み要因

Build

A). 新規デジタル・アプリ開発

LOB がデジタル化や企業変革を推進

新規ビジネスへの参入を目指している

アプリケーションや基盤の更改が無い

B). DevSecOps 開発環境

開発チームが大規模で並行作業を実施

既にある程度オープンソースを活用

セキュリティを重視している

Manage

E). マルチクラウド管理

複数クラウドで管理が困難

クラウド管理が個別最適

オンプレと管理が異なる

クラウド費用が見えてない

Move

C). 既存システム・モダナイゼーション

既存システムの更改の時期が迫っている

既存システムやベンダーに不満がある

既存システムをきれいに作り替えたい

既存システム資産を利活用したい

D). コンテナへのマイグレーション(LIFT)

既存システムの運用コストが高く不満

数十 VM 環境など規模が比較的大きい

基盤運用をさらに高速化・効率化したい

Journey to Cloud の取り組み要因

Build

A). 新規デジタル・アプリ開発

LOB がデジタル化や企業変革を推進

新規ビジネスへの参入を目指している

アプリケーションや基盤の更改が無い

B). DevSecOps 開発環境

開発チームが大規模で並行作業を実施

既にある程度オープンソースを活用

セキュリティを重視している

Manage

E). マルチクラウド管理

複数クラウドで管理が困難

クラウド管理が個別最適

オンプレと管理が異なる

クラウド費用が見えてない

Move

C). 既存システム・モダナイゼーション

既存システムの更改の時期が迫っている

既存システムやベンダーに不満がある

既存システムをきれいに作り替えたい

既存システム資産を利活用したい

D). コンテナへのマイグレーション(LIFT)

既存システムの運用コストが高く不満

数十 VM 環境など規模が比較的大きい

基盤運用をさらに高速化・効率化したい

ケース 1

API 化

SoE と SoR の分離

コンテナ化

現行の課題

- 長年かけて構築した **ホスト基幹系にある価値あるアプリケーション・データの資産** を、フロントアプリケーションの刷新・構築にあわせて、**有効活用** したい
- 現行連携基盤(ESB)が老朽化し、保守開発に時間とコストがかかっており、**ESB 層の負荷を軽減** したい

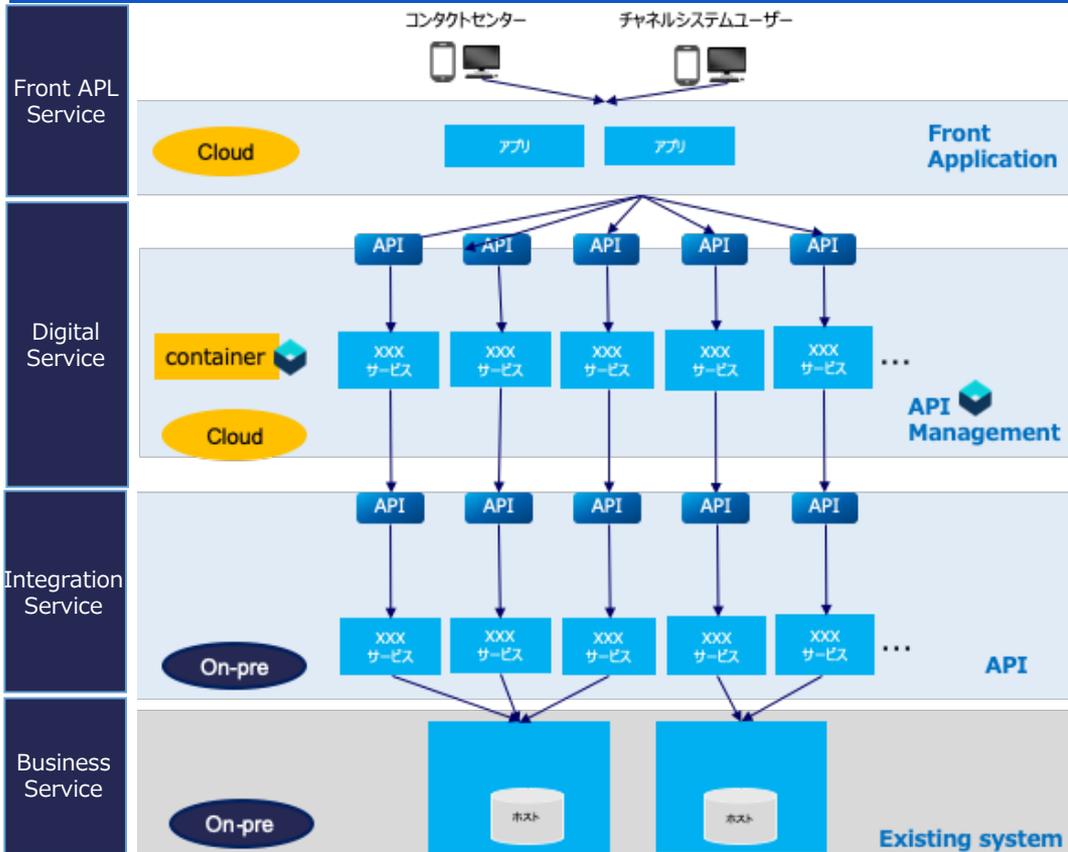
ご提供ソリューション

- ホスト(z/OS)上の基幹システム資産をシンプルに API 化するため、z/OS Connect を採用し、**基幹システム上で API 化** を実施
- **デジタルサービスレイヤー** を配置し、API 公開のための API 管理基盤層を導入
- API 管理基盤層に **柔軟なコンテナ環境** で稼働

成功の秘訣

- ホスト資産利活用の **トップダウン指示** の徹底
- プロジェクト開始までに **テーマ毎 PoC** による技術検証
- ホストアプリの **トランザクション単位** が適切であった

To-Be アーキテクチャー概要



ケース2

API化

SoEとSoRの分離

コンテナ化

DevOps適用

現行の課題

- 各事業で利用される顧客データが散在し、ガバナンスが届かず再利用性が低い
- データとアプリケーションが密結合となっており、システム構造がサイロ化されている
- アプリケーションのリリースサイクルを短縮したい

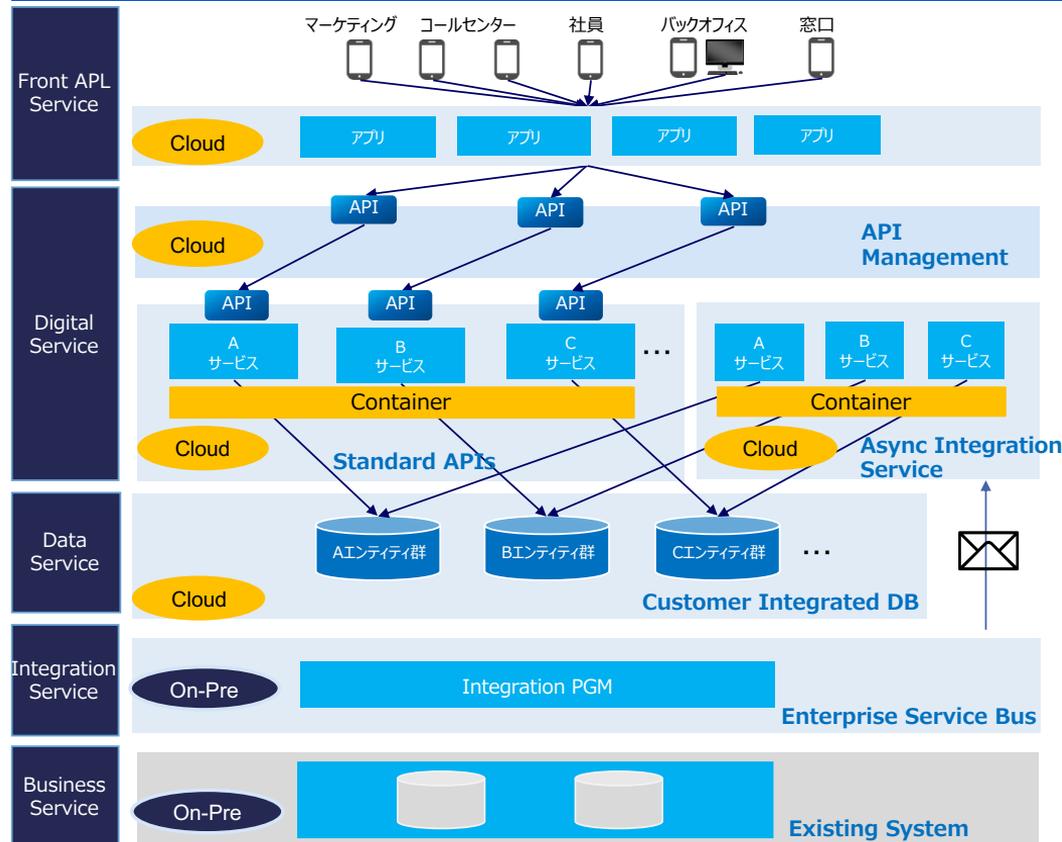
ご提供ソリューション

- IBM提唱の次世代アーキテクチャーを参照しデジタルサービスレイヤー、API化を実現
- 既存システムに影響なく、統合管理DBを構築し顧客情報を集約
- フロントはマイクロサービスアーキテクチャ&コンテナ適用し開発

成功の秘訣

- 業務ドメイン単位にマクロサービスを作成し、サービスとデータを管理
- データ活用の非機能要件に応じたインターフェースの設計と、APIによるデータアクセスの管理徹底

To-Be アーキテクチャー概要



ケース3

API化

SoEとSoRの分離

コンテナ化

DevOps適用

現行の課題

- 個別開発によりサイロ化され、利便性の低いインターネットサービスに改善したい
- 各種のキャッシュレスへの対応やSNS連携の強化により新ビジネス領域への展開したい
- 既存アプリケーションの老朽化により、保守開発のコスト増やスピード・生産性の低下している

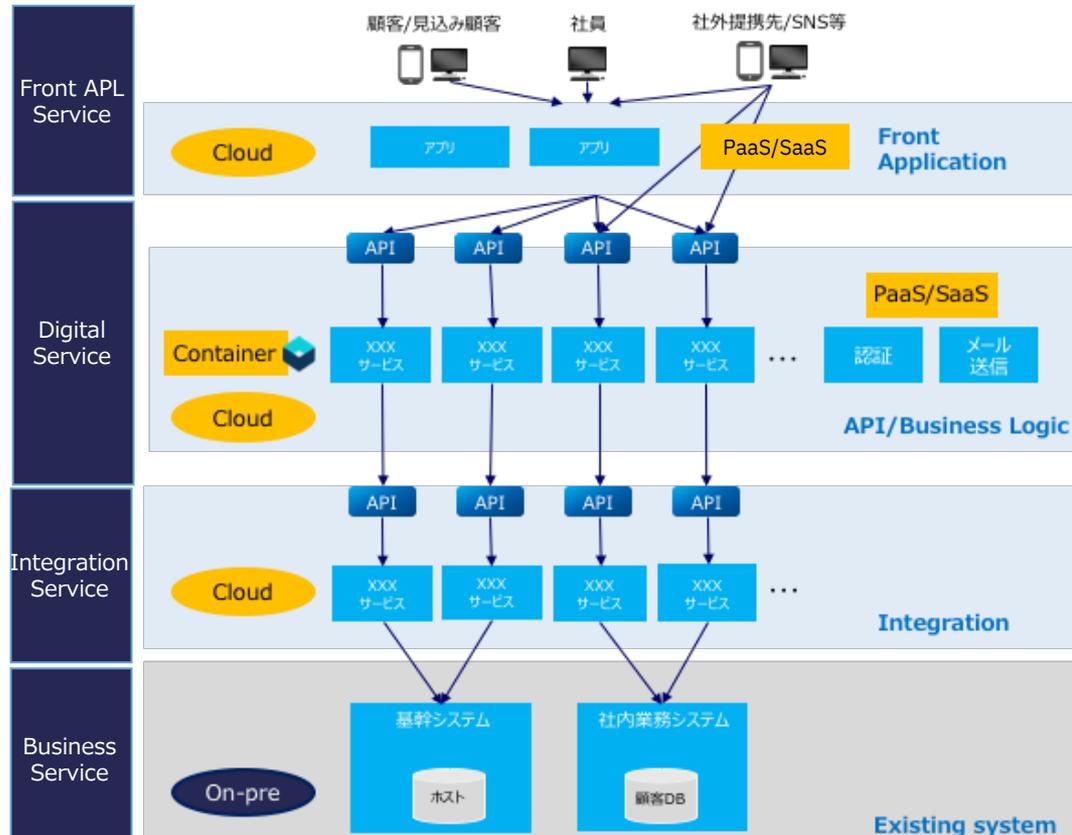
ご提供ソリューション

- PaaSやSaaSを有効活用し、ビジネス施策を低コストで早期に実現
- クラウドネイティブ、コンテナ化による、保守性・拡張性の高い柔軟なアプリケーション構造
- Agile/DevOpsを活用した開発スタイル変革によるタイムリーなサービスの実装・展開

成功の秘訣

- 構想フェーズでの現状分析と対象の優先度付けを実施
- お客様自身が価値を理解し、開発方針を徹底
- 分散処理(BASE)特性を前提とした要件整理と実装設計

To-Be アーキテクチャー概要



成功の秘訣

- 人/組織面
 - トップダウンによる社員の意識改革やリスキルの推進
- 計画面
 - プロジェクト開始前/初期段階での現状調査・技術検証
 - Agile ソフトウェア開発の適切な取り込み
- 実装面
 - 分散処理特性を前提とした設計（例：フェイルセーフ）
 - 個別最適と全体最適のバランス

IBMのご支援内容

将来の企業モデル
(Cognitive Enterprise)
に向けた様々なサービス提供

日本を含めたグローバルの
事例・知見を提供

各分野でのエキスパートが
チームで支援

(参考)将来の企業モデル <https://www.ibm.com/jp-ja/services/cognitive-enterprise-japan>

「今すぐ役立つクラウド活用術」 トピック別オンデマンド・シリーズ

	タイトル	ご担当領域	スピーカー
#1	クラウドアドバイザーで始める デジタル変革第二章	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 アソシエイトパートナー/エグゼク ティブアーキテクト 八木沼剛
#2	レガシー・マイグレーション	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 マイグレーション・エキスパート 北沢強
#3	コンテナ化アセスメント	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 IBM Open Cloud Center 吉田ひろみ
#4	クラウドネイティブ時代の 新しいシステム開発	アプリ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 シニア・アーキテクト 石井真一
#5	DevSecOpsと次世代超高速開発ソリュー ションを活用したクラウドアプリケーション 開発・運用のご紹介	アプリ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 アソシエイト・パートナー 谷松清孝
#6	お客様の取り組み	アプリ系 インフラ系	日本アイ・ビー・エム株式会社 技術理事 Complex System Integration CTO 久波健二

ワークショップ、セッション、および資料は、IBMまたはセッション発表者によって準備され、それぞれ独自の見解を反映したものです。それらは情報提供の目的のみで提供されており、いかなる参加者に対しても法律的またはその他の指導や助言を意図したのではなく、またそのような結果を生むものでもありません。本講演資料に含まれている情報については、完全性と正確性を期するよう努力しましたが、「現状のまま」提供され、明示または暗示にかかわらずいかなる保証も伴わないものとします。本講演資料またはその他の資料の使用によって、あるいはその他の関連によって、いかなる損害が生じた場合も、IBMは責任を負わないものとします。本講演資料に含まれている内容は、IBMまたはそのサプライヤーやライセンス交付者からいかなる保証または表明を引き出すことを意図したもので、IBMソフトウェアの使用を規定する適用ライセンス契約の条項を変更することを意図したものでなく、またそのような結果を生むものでもありません。

本講演資料でIBM製品、プログラム、またはサービスに言及していても、IBMが営業活動を行っているすべての国でそれらが使用可能であることを暗示するものではありません。本講演資料で言及している製品リリース日付や製品機能は、市場機会またはその他の要因に基づいてIBM独自の決定権をもっていつでも変更できるものとし、いかなる方法においても将来の製品または機能が使用可能になると確約することを意図したものではありません。本講演資料に含まれている内容は、参加者が開始する活動によって特定の販売、売上高の向上、またはその他の結果が生じると述べる、または暗示することを意図したもので、またそのような結果を生むものでもありません。パフォーマンスは、管理された環境において標準的なIBMベンチマークを使用した測定と予測に基づいています。ユーザーが経験する実際のスループットやパフォーマンスは、ユーザーのジョブ・ストリームにおけるマルチプログラミングの量、入出力構成、ストレージ構成、および処理されるワークロードなどの考慮事項を含む、数多くの要因に応じて変化します。したがって、個々のユーザーがここで述べられているものと同様の結果を得られると確約するものではありません。

記述されているすべてのお客様事例は、それらのお客様がどのようにIBM製品を使用したか、またそれらのお客様が達成した結果の実例として示されたものです。実際の環境コストおよびパフォーマンス特性は、お客様ごとに異なる場合があります。

IBM、IBM ロゴ、ibm.com、IBM Cloud Pak、z/OS は、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corporationの商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

JavaおよびすべてのJava関連の商標およびロゴは Oracleやその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Red Hat®, OpenShift® are trademarks or registered trademarks of Red Hat, Inc. or its subsidiaries in the United States and other countries.